地方小出版 情報誌
アクセス

毎月1回　1日発行
購読料　定価150円
（本体136円）
年間1,500円（税込み）
振替　00120-0-19017

発行所　㈱地方・小出版流通センター
編集　アクセス編集委員会
〒162-0836　東京都新宿区南町20
TEL.03-3260-0355　FAX.03-3235-6182

地方出版文化功労賞奨励賞受賞に際して

『小学生が描いた昭和の日本 児童画五〇〇点 自転車こいで全国から』

50年前の小学生たちとの出会い

文／石風社　福元満治

縁のなせるわざ

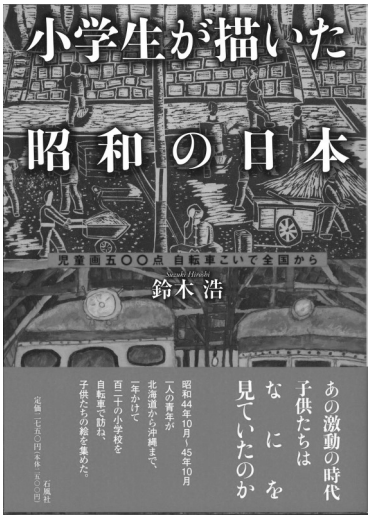
小社の書籍は、人との縁でできたものが多い。もちろん私が企画して著者に依頼した書籍もあるが、それよりも人との縁で形になったものが多い。

『小学生が描いた昭和の日本　児童画５００点　自転車漕いで全国から』も、人との縁からできた本である。著者の鈴木浩さんは埼玉県川越市在住、小社は福岡市にあり、鈴木さんとの面識はなかった。

ある時奈良の方から、障害のある息子さんが若い時に書いた自分史を本にしたいという話をいただいた。その方が小社に出版の依頼をされたのも、小社が刊行した中村哲医師の『医者、用水路を拓く　アフガンの大地で世界の虚構に挑む』を読んだからとのことだった。

その方の知人が鈴木さんで、その本の校正などを間接的に手伝っていただいたのだが、その仕事ぶりに誠実な人柄を感じていた。やりとりはメールだったのだが、本が出来上がったあとに、鈴木さんから、「実はこんなことをしています」といって、送られてきたのが、「ウェブサイト児童画展・ありがとうの絵」という画像だった。それは、５０年以上前の小学生たちが描いた絵をウェブ上に展覧したもので、子供たちの絵と作文が県別に収録されていた。

その絵は、まだ大学を出たばかりの鈴木さんが、１９６９年１０月～７０年１０月の１年間をかけて全国各都道府県の小学校をめぐって集めたのである。その数約５００点、沖縄以外はすべて自転車を漕いで１２０を越える小学校を廻ったのである。鈴木さんは、集めた絵を東京のデパートか美術館で展覧する希望を持っていたのだが、それに応えてくれるところはなく、地下鉄銀座駅の連絡通路のギャラリーで展覧したことで終わっていた。その後長い間トランクで眠っていた絵を友人たちが、デジタルで復活させたのである。



『小学生が描いた昭和の日本　児童画五〇〇点　自転車こいで全国から』鈴木　浩（編著）・石風社刊／税込2,750円／ISBN978-4-88344-310-9

前途多難の絵画収集の旅

就職せずに１年間アルバイトでためた資金でスポーツ車を購入して東京を出発した鈴木さんは、友人たちに見送られて自転車を漕ぎ出した。自転車の前後の荷台と両輪のサイドは、野宿用具一式で体重ほどに重くなっている。新車を颯爽と漕ぎ出したはいいが、ふらふらとみんなの前で倒れてしまった。前途多難である。津軽海峡を越えると降りしきる雪。スリップする自転車を漕いだり電車に乗ったりの北海道は、函館から網走まで１８校の小学校を訪ねた。

各地の小学校や教育委員会には、児童画提供の「お願い書」を持参するものの、紹介状一つない青年が「個人的に展覧会を開きたいので、児童画を提供ください」とお願いするのだから、今より人を疑うことのなかったあの時代でも、門前払いも多かった。それでもめげない鈴木さんとそれを受け入れる温かい人々がいた。「若い時しかできないことです。頑張ってください」「児童画展の成功を祈ってます」と、絵画を集めたり一夜の宿を提供したり食事を振る舞ってくださる方々も少なくなかったのである。

道中日記によると、

「出発から２週間たった。そのうち六泊が駅の待合室。ユースホステルなどの宿泊施設が５泊、友人宅などお世話になったのが３泊。

待合室やベンチで寝袋で寝るのにも少し慣れてきた。夕方秋田県能代市に到着。国際劇場という映画館で「網走番外地大会」を上映しているのを見て飛び込んだ。私は高倉健さんのファン

ちょっと疲れた様子の鈴木浩氏

だ。」（１９６９年１０月２７日）ただ、映画館の観客は一人だった。

長万部の小学校では、趣旨に賛同してもらえなかった。

「何の得にもならないことに一年もかけて、しかも自費でやっていることがどうしても理解できず、何か他意があるのではないかと疑われたようだ」（１１月６日）

時代と土地柄

なぜ、そんなことを考えたのかということについては、鈴木さんは２つの理由を挙げている。ひとつは絵が好きで、とくに子どもの絵には「自由で素直な表現がある。子どもが伸び伸びと自由に描いた絵を日本中から集めて児童画展を開いたらどんなに面白いだろう」と考えたのだ。子どもたちの絵を通して見ると「日本の生活や風土にきっと様々な発見があるに違いない」ということに加え、「全国を旅して自分なりに日本という国を感じてみたい」と思ったのである。

子供たちの絵に描かれているのは、昭和４０年代の日本である。土地の風景から民家、工場、農地、漁場、お祭り、家庭生活、学校生活、友人に親兄弟まで、多岐にわたる。田畑や工場で働いている親を描いた絵も多い。まだ、第一次産業の農林水産業が２割あり、二次産業を合わせると５割を占めていた日本の農業や漁業に林業の熱が伝わってくる。しかし時代は、製造業からサービス業さらに情報産業へと変わる過渡期であり、高度経済成長期のとば口である。７０年には、その象徴のように大阪万博もあるのだが、経済の発展だけではなく、その矛盾も吹き出していた。子供たちは、日常の生活だけでなく公害問題も描いている。

鈴木さんは、旅も終わりに近い頃、鹿児島県の阿久根から熊本県の水俣に向かって、自転車を漕いでいた。

「阿久根の辺りから見る海の眺めは雄大ですっかり魅了された。それだけに水俣の町がひっそりとして、どことなく暗い感じがするのが気になった。国が水俣病の原因物質を工場廃液に含まれたメチル水銀であると認めたのは一九六八年のことだった。

夜になっても水俣駅前のチッソ工場の煙突からは煙が出ていた。駅前のバス待合室のベンチで眠る」（１９７０年９月２日）

チッソ工場（水俣第一小学校６年　はな久ゆかり）

実は偶然だが、この時期私も水俣にいたのである。１９６８年に水俣病が公害認定されると、患者家族がチッソの企業責任と損害賠償を求めて提訴したのである。１９６９年６月１４日のことである。私はその時熊本の学生で裁判支援に関わっており、この９月の時期は、水俣病の患者さんの漁の手伝いをしていたのである。

子どもたちの絵と作文

絵だけではなく、短いけれど作文も付いているものがある。いくつか原文のまま紹介しよう。

「石炭が留萌の港から、たくさん積みだされています。冬の寒い間は石炭が凍ってなかなか車から落ちません。ほかの町では暖房であたためていますが、留萌では施設がないので寒い冬でもつるはしで貨車をたたいて石炭を落とします。これを“がんがんたたき”といって留萌市の名物になっています」（留萌市　港北小学校５年　小松恵）

「ぼくは　去年の秋　雨がふっているときに、祖父と父とぼくとで、きみまち坂の山へいきました。祖父の森を、見にいきました。そのときに、木を、

留萌の「がんがんたたき」

「ばっさい」

ばっさいしていたので、ずっと見ていたら、ぼく自しんが、こわくて、ふるえてきました。そのとき、ばっさいをしていた人の足が、つるっとすべって、ころびそうになったので、びっくりして目をつぶってしまった。」（秋田県大館市　釈迦内小学校５年　小池志郎　「ばっさい」）

「岐阜県土岐市下石町には。社会科に出てくるような、自動車工場のような、きんだいかされた工場はあまりない。やきものも　手で作るものが多い。でも、そんなしごとを、している人は明るく、いっしょうけんめい動いている。わたくしは、その働く人の、美しい後ろすがたを書いてみました」（岐阜県土岐市　下石小学校５年　安藤千都勢　「やきもの」）

タイムカプセルとしての出版

鈴木さんは、私に「ウェブサイト児童画展・ありがとうの絵」を見せた時に、それを本にしようとか本になるとかを考えていたわけではない。ただ私は編集者である。直感は、これは本にすべきだと私を促した。何よりも子どもたちの絵がすばらしかった。それは、北海道から沖縄まで、それぞれの風土が匂い立つようで、人間の身体性にあふれていた。才能というよりもエネルギーが存在していた。多分、描いた本人たちもその絵を描いたことなど忘れているだろう。すでに５０年が経っている。今ではみな還暦前後、一仕事終えた世代である。もしも彼らがそれを見ることがあれば、なによりのタイムカプセルである。それは、描いた本人だけでなく、あの時代に小学生であった世代にとってのタイムカプセルではなかろうか。

絵画の数は５００点である。それを全てカラーで収録することには迷いもあった。いろいろ逡巡することもあったが、手に取りやすいA5判で、細かい編集はせずに、北から南まで県別に全てカラーで３４０ページに収録したのである。

やきものを作る人

出版後の反響はそれなりにあった。朝日、日経などの全国紙から、各地元紙が大きく取り上げてくれた。そして今回「地方出版文化功労賞」の奨励賞をいただくことになった。ありがたいことである。ただ、少し残念なこともある。

実は、本書の出版とメディアの紹介で、多くの元小学生が、これは自分の絵だと名乗り出てくださると考えたのである。しかし、出版後１年経過しても、まだ十名ほどである。昔の自分の絵と再会された方は、みな一様に感激されて、「昔の自分に出会えた」と喜んでくださった。なんとか、多くの方に再会してほしいと希っている（申し出た方には、本書を１冊献本しております）。

絵の永久保存と展覧について

最後になるが、鈴木浩さんの願いは、子どもたちの絵を美術館で一堂に展覧したいということであった。この願いは昨年３月、福岡県の田川市美術館のご協力で実現した（２０２２年３月１０日～３月２７日）。３つの部屋で一堂に展示された500点の絵は、やはり圧倒的だった。

本書の編著者である鈴木浩氏と石風社では、子どもたちが描いた約５００点の絵を、散逸することなく後世に残すために、作品を永久保存してくださる美術館を探しております。また、子どもたちの絵を展覧してくださる美術館や施設を募っております。ご希望の施設がありましたら、石風社までご連絡いただければ幸いに存じます。

＊

（ふくもと　みつじ／石風社代表）

新刊ダイジェスト

表示されている値段は本体価格となっております。ご購入には別途、消費税がかかります。

『頭山満・未完の昭和史 ―日中不戦の信念と日中和平工作』●石瀧豊美 著

頭山満は、『広辞苑』に登載されるほどの歴史上の人物だが、今、その名を知る人はどれほどいるだろうか。この辞書には、右翼の巨頭、萩の乱に連座して入獄し、出獄後は自由民権運動に従い玄洋社を創設、国権の伸張、大陸進出を唱えた政界の黒幕とある。だが、生涯在野の無位無官を貫き、時に政府と対立して、国を追われた孫文やインド民族運動の指導者ラス・ビハリ・ボースに救いの手を差し伸べたこと、何より、日中和平工作に邁進したことは記されていない。

著者は前著『玄洋社・封印された実像』（海鳥社　2010）で、綿密な史料批判に基づいて、玄洋社は秘密結社でも大陸侵略戦争の先兵でもなかったとの論陣を張った。同様に本書では、頭山にまとわりつく、超国家主義者、侵略主義者の烙印も、戦後歴史学のうわべだけの判断であり、誤解され、おとしめられて正当な歴史評価を受けていないと主張する。

共に近衛文麿首相と連絡を取りながら中国との接触を図った元法相小川平吉の日記、日中戦争のさ中に玄洋社が発行した日中親善を訴える冊子、頭山の死後に中国各地で催された頭山追悼会の様子を報じた現地新聞などを傍証し、頭山の日中和平にかける思いを浮き上がらせる。戦後の研究書は頭山のアジア主義を侵略の側面でしかみていないと厳しく批判し、昭和史は未完のジグソーパズルであり、頭山のピースが埋まらないと、昭和史というパズルは完成しないと述べる。（飯澤）

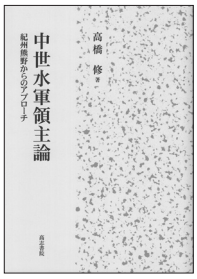
◆ 3800円・A５判・376頁・**花乱社**・福岡・202309刊・ISBN9784910038780

『生きた言語とは何か ―思考停止への警鐘』●大嶋仁 著

著者には既に『メタファー思考は科学の母』（弦書房）という著書がある。そこでは、対象を別のものに喩えたり、自己の身体感覚や生命感覚を世界に投影するアニミズム的なメタファー思考が、言語習得以前から人の認知機能を支えており、もしこの原初的思考が十全に育まれなかったら科学を支える論理思考もまた十分に育つことはない、と述べられていた。当時、文科省による国立大学人文社会科学系学部・大学院の見直し案が文系不要論と捉えられ、大きな議論となっていた時代背景があった。本書『生きた言語とは何か』においても著者の考え方は一貫しているが、時代は人工知能すなわちAIのめざましい進化の只中にある。著者はこういった時代環境を言語の問題として捉え、今回は言語論から斬り込んでいくのである。そして、死をもたらす言語と生命ある記号、イデオロギーと詩、さらには、生に密着した感情の言語と生から離れた理知の言語、といった対比によって、メタファー思考を焦点化しつつ、流動する具体的で感覚的な相を捨象してしまう「言語の監獄化」に警鐘を鳴らす。興味深いのは、著者のこのような着想の原点となった経験を語った部分である。フランス留学時代、毎日デカルトの『方法序説』を読んでいたところ、それまで愛読していた小林秀雄の独特なニュアンスに富む日本語が外国語のように遠く感じられ頭に入ってこなくなってしまった、この事態を救ってくれたのがレヴィ＝ストロースの『野生の思考』だった、という。（N）

◆ 1900円・四六判・224頁・**弦書房**・福岡・202309刊・ISBN9784863292734

『中世水軍領主論 ―紀州熊野からのアプローチ』●高橋修 著

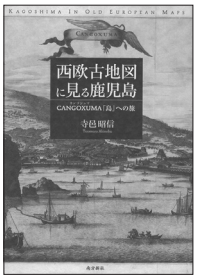


治承・寿永の内乱期、熊野別当湛増が平家につくか源氏につくかで悩んだ末、新熊野の社頭における鶏合せで源氏につく決断をしたという「平家物語」の記述はあまりにも有名である。勿論フィクションではあるが、湛増らの参加が壇ノ浦合戦での源氏の勝利を決定的にしたことには変わりはない。湛増率いる熊野水軍が以仁王の令旨を受け取るや即座に反平氏の狼煙を上げたことや、当時の熊野における湛増の権力がそれほど大きくなかったことなどを聞かされると、何やら穏やかではなくなる。長年平家に恩義を感じている湛増が以仁王の令旨に呼応する新宮や那智の勢力に戦いを挑み、さらには京に上って平宗盛に反平氏勢力の蜂起を知らせるなど平家方として描かれている「平家物語」の湛増像が崩れ去るからだ。

また、当時の熊野別当家は熊野三山それぞれの系統に分れ、新宮家と田辺家（湛増系）との間で別当職をめぐる権力争いが起こっており、湛増が自身の勢力拡大のためにこの内乱を利用したことが事の真相だと知ると、ただ単に源氏と平家の権力争いと考えがちな治承・寿永の内乱も多層的な構造を挺していたということが改めてわかる。熊野のいう土地柄が平家の本拠地・伊勢国と平家の勢力基盤である瀬戸内周辺とのちょうど中間にあり、エアポケットを成していたという指摘は注目すべき。平忠度の生誕地伝説（本書第１章付論）や平維盛の入水伝承も熊野という特異な土地だからこそ生れたものだろう。（Ｉ）

◆ 5000円・A５判・249頁・**高志書院**・東京・202309刊・ISBN9784862152398

『西欧古地図に見る鹿児島 ―ＧＡＮＧＯＸＵＭＡ「島」への旅』●寺邑昭信 著



鹿児島には16世紀から西欧人が出入りしており、西欧でもそれなりに知られた地名となっていました。そのため当時のヨーロッパにおける世界地図には、日本地名のひとつとしてしばしば鹿児島が記載されています。しかしそれらを見比べてみると、表記や場所などには違いが見られます。著者はそうした西欧の地図に表された鹿児島を図版ごとに比較していきます。もちろん当時の西洋にとって日本の情報など少ない時代でしたし、正確でないのは当然ですが、鹿児島に絞って注目してもいろいろなことが見えてきます。例えば現代ではその表記については "Cangoxina" であったとするのが膾炙しているようなのですが、著者が様々な地図にあたってみると、実際には "Cangaxuma""Cangoxima" など様々な表記があり、むしろその中では "Cangoxina" は少数であったこともわかってきます。

他にもショイヒツァーなる人物が作った日本地図の薩摩国西海岸上に忽然と姿を現した "Cangoxuma" 島についても考察を巡らせています。この謎の島を調べていくと、彼が参考元とした図には存在しませんでした。ということは何らかの理由で彼の手により加筆されたことになります。そこからは鎖国により日本の最新の情報が入りにくくなったことや、それぞれの先行地図への評価など、西欧の地図製作事情まで垣間見えてきます。正確な地図など作りようがないから、荒唐無稽でもやむを得ないと考えがちなところを敢えて切り込んでいくことで、意外な背景が見えてくる一冊です。（副隊長）

◆ 3800円・Ａ５判・319頁・**南方新社**・鹿児島・202308刊・ISBN9784861244841

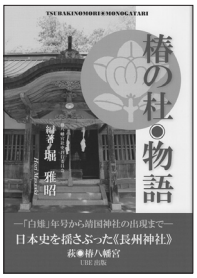
『寺山修司　彼と私の物語 ―九條今日子の告白』●青目海 著

「あなたは仕事でいろんな人物を演じたけど、そろそろ寺山映子という役を演じてみない」これが決め台詞となり、1962年に結婚した寺山修司と九條今日子（本名は映子）。かつて松竹歌劇団（ＳＫＤ）の踊り子で、その後女優になり、結婚後は寺山と共にアングラ劇団「天井桟敷」を創り、離婚してからも劇団のプロデューサーを務め、寺山亡き後もその遺志を継ぎ、寺山作品の著作権管理を行うなど、精力的に活動を続けてきた。しかし、2014年に死去。亡くなって一年後、「天井桟敷」の創立メンバーだった著者が晩年の九條と過ごした数年間を書き始めた。

当時著者が暮らしていたポルトガルでの日々を綴ったエッセイの出版がおよそ四十年ぶりの再会のきっかけで、しかも二人で飲むのも初めてだったが、以後、帰国のたびに思い出の店で酒を飲み、料理に舌鼓を打つ。酔いもあいまって語られる寺山との日々を聞きながら、著者自身の記憶も甦る。最後に会ったのは暮れも押し迫った銀座の小料理屋。「アンタといるといろんなこと思い出すのよ」と、離婚後、偶然会った中華の店を出た後、雪が舞い始めた銀座の空を寺山と一緒に見上げて「きれいだった」と懐かしむ九條。その時、何かが吹っ切れて、寺山のために劇団のために精一杯仕事をしようと思ったと語った。数々のエピソードから当時のカルチャーがわかるのも興味深い。さらに寺山の類まれなる感性を改めて思い知らされると共に、在りし日の二人の素顔が浮かび上がる。（Ｙ）

◆ 1900円・四六判・277頁・**書肆侃侃房**・福岡・202308刊・ISBN9784863855847

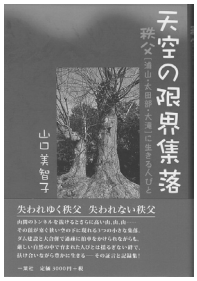
『椿の杜　物語 ―日本史を揺さぶった＜長州神社＞萩　椿八幡宮』●堀雅昭 著



会津藩家老の子孫で、戦後「右翼のフィクサー」となった田中清玄が、靖国神社を「長州の守り神にすぎない」（『田中清玄自伝』）と揶揄したのは有名だ。本書は、そんな《長州神社》の由来ともなった山口県萩の椿八幡宮の歴史を描いた初のビジュアル版History Bookである。幕末を駆け抜けた青山清宮司は、討幕戦争で亡くなった志士たちを神として祀り、維新後に靖国神社の初代宮司になっていた。これに先駆け、戊辰戦争の直前に、「錦の御旗」の密造にも関わる。扉に使われているのは、その日月旗（錦旗）なのだ。この話は『山口県史　通史編　幕末維新』にも出てこないが、歴史好きにはわりと知られている。本書の面白さは、公式の維新史から外された箇所を、あえて丁寧にすくいあげているところだろう。一方で、椿八幡宮の歴史は古く、NHK大河ドラマ「鎌倉殿の13人」に登場した佐々木高綱が、仁治四（１２４３）年に創建していた。高綱は吉田松陰の叔父・玉木文之進や乃木希典の祖でもある。境内の祇園社は更なる母体で、豪族「椿氏」が護ってきた古社。彼らのルーツは『日本書記』に登場する草壁連醜経（クサカベノムラジシコブ）で、地元で獲れた白いキジを朝廷に献上し、「大化の改新」後の初の改元「白雉」年号を成立させていた。古代から明治近代まで、時代の変革期に輪郭を見せる謎の《長州神社》。長州好きにも、長州嫌いにも、注目の一冊。公式記録から消された歴史の謎解きが、本書の楽しみ方ともいえそうだ。（沢田陽介）

◆ 1500円・Ａ５判・133頁・**ＵＢＥ出版**・山口・202310刊・ISBN9784910845036

『天空の限界集落 ―秩父［裏山・太田部・大滝］に生きる人々』●山口美智子 著



埼玉県西部、荒川の源流がある秩父には、浦和や熊谷、所沢など平野部とは明らかに異なる風土がある。それは四方が山に囲まれているなどの地理的な要因を主とするが、それゆえに育まれた独自性が強い文化があるからなのだろう。

本書では、昭和20年に秩父で生まれ、育った著者が、秩父の中で過疎が進んだ三地区（浦山・太田部・大滝）について、地区ごとに8名ずつ、計24名の住民の声の聞き取りを行い、昔日の記憶を中心として、地区に関わるさまざまな事柄をまとめている。秩父郡太田部村は明治22年の市町村制施行時に消滅したが、浦山村は昭和31年（昭和の大合併）まで、大滝村は平成17年（平成の大合併）まで存続した。三地区の規模は大滝、浦山、太田部の順で大きい。登場する方の多くは昭和3年（1928）から20年（1945）に地区内で生まれ、育ち、住み続けている。昔日の記憶は昭和20年代から40年代までが多く、地区内のことが大半なので独自性が強い。山奥に炭焼きの家族が入って暮らしていたこと、夏の祭りに瞽女がやってきたことなど、今は想像できない。

取材時期はほぼ平成28年（2016）から令和元年（2019）までなので、登場人物の中には亡くなられた方もいるであろう。住民がごくわずかになり、これから三地区はどうなっていくのだろうか。歴史は人が入れ替わることで動いていくことを強く感じた。（HEYANEKO）

◆3000円・四六判・364頁・**一葉社**・東京・202310刊・ISBN9784871960922

『ウィーン、わが夢の街 ―フロイトと熊楠』●平山令二 著

この物語の語り手の「私」は、元外務省高官。1945年の東京大空襲の日、屋敷にひとり残っている「私」は空襲の轟音の中で、懐かしいメロディーを聞いたような幻聴を覚える。それは「ウィーン、わが夢の街」というウィーンの昔の流行歌だった。その歌を聞きながら「私」の思いは、1900年のオーストリア＝ハンガリー帝国の首都、ウィーンへと飛んでいく。そこでまず読者が目にするのは、大酒を食らって「私」に唾を撒き散らしながら大声で話し続ける熊のような太った男である。何でも紀州の生まれで、子どもの頃から山中を庭のように歩き回り、天狗とも友達付き合いをしていたという。そう、柳田國男や折口信夫とともに日本民俗学の創始者の一人でありまた博物学の巨星とも言われた南方熊楠である。当時熊楠がウィーンへ向かったという史実はないが、ここで熊楠が登場するのは、オーストリア帝国との文化的交流を深めるためにウィーンの日本大使館がロンドンの大英博物館の館員をしていた熊楠に白羽の矢を立てた、というこの物語の設定による。そしてロンドン大使館員だった「私」が熊楠をウィーンの街まで案内し、共にこの都の様々な顔を見ていくのである。物語の大きな魅力となっているのは熊楠が行く先々で出会う著名な芸術家や学者、学生たちと交わす知的な議論の中身である。中でも興味深いのが、当時『夢判断』を出版したばかりのフロイトと熊楠の、それこそ「夢」のような対話である。ほんとうにこんな場面が実現していたら、と思わずにはいられない。（U）

◆2600円・四六判・517頁・**鴎出版**・千葉・202309刊・ISBN9784903251219

地方小出版 流通センター　ジャンル別 新刊案内

2023年9月1日～30日
流通センター着

※各ジャンル内での出版社名は所在地の北から南の順に並んでいます。

表示されている値段は本体価格となっております。ご購入には別途、消費税がかかります。

【雑誌】

◆Radiation Environment and Medicine Vol.12 No.2 弘前大学出版会編　280mm×210mm　139頁　1100円　弘前大学出版会［青森］978-4-503-22934-2　23/09

◆**仙台　酒とごはん　－S－style kappo特別編集**　プレスアート編　280mm×210mm　95頁　1200円　プレスアート［宮城］978-4-503-22946-5　23/09

◆S－style 10 vol.706 プレスアート編　280mm×210mm　135頁　600円　プレスアート［宮城］978-4-503-22947-2　23/10

◆GREEN REPORT 525 2023年9月号　廣瀬仁編　A4　191頁　2800円　地域環境ネット［埼玉］978-4-909864-57-4　23/09

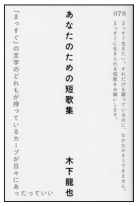
◆**書21**　No.79　匠出版編　A4　112頁　2000円　匠出版［神奈川］978-4-925212-89-2

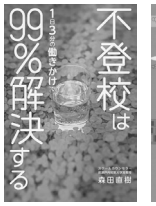
売行良好書

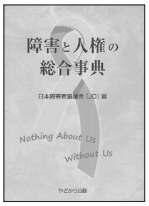
期間：2023年9月15日～10月14日
※価格は本体価格表示です。別途消費税がかかります。

［出荷センター扱い］

(1)『あなたのための短歌集』1700円・ナナロク社　(2)『出雲と蘇我王国』2200円・大元出版　(3)『不登校は1日3分の働きかけで９９％解決する』800円・リーブル出版　(4)『よみきかせのきほん』750円・東京子ども図書館　(5)『障害と人権の総合事典』2700円・やどかり出版　(6)『黒船前夜　新装版』2200円・弦書房　(7)『「寝た子」はネットで起こされる！？』1500円・福岡県人権研究所　(8)『利尻島から流れ流れて本屋になった』1700円・寿郎社　(9)『水上バス浅草行き』1700円・ナナロク社　(10)『ミステリ映像の最前線』2300円・書肆侃侃房　(11)『まんが長崎の原爆を生きぬいて』1300円・ポトス出版　(12)『出島動物図鑑』2000円・長崎文献社

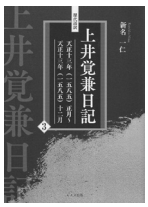






［ジュンク堂書店池袋店　地方出版社の本―センター扱い図書］

(1)『逆転力、激らせろ　希望を咲かせて』1800円・ＩＡＰ出版　(2)『モールの想像力　ショッピングモールはユートピアか』2000円・本の雑誌社　(3)『老人ホームで死ぬほどモテたい』1700円・書肆侃侃房　(4)『現代語訳　上井覚兼日記３』2200円・ヒムカ出版　(5)『明治維新と西郷隆盛』2130円・大元出版　(6)『沖縄の身近な植物図鑑』4500円・ボーダーインク　(7)『サルタ彦大神と竜』2000円・大元出版　(8)『出雲王国とヤマト政権』2250円・大元出版　(9)『中国中世の服飾』3800円・中国書店　(10)『振り返れば未来　山下惣一聞き書き』2000円・不知火書房　(11)『食べて祀って』2000円・弦書房　(12)『新装版　江戸という幻景』1800円・弦書房　(13)『出雲と蘇我王国』2200円・大元出版　(14)『上宮太子と法隆寺』2778円・大元出版　(15)『神の川　永遠に』1800円・北日本新聞社　(16)『調査されるという迷惑』1000円・みずのわ出版



以下ホームページ等でも各種情報提供を行なっております。ご利用ください。
ＵＲＬ：http://neil.chips.jp/chihosho/　　Ｘ（旧ツイッター）公式アカウント：@local_small

トピックス ―― ★★★

▼先般、第36回地方出版文化功労賞の受賞作が発表されました。最優秀にあたる功労賞は該当作がなく、奨励賞に２点、特別賞に１点が選ばれています。その奨励賞のうちの１点が、今回、本誌１面にご寄稿いただいた石風社さんの**【小学生が描いた昭和の日本　児童画五〇〇点　自転車こいで全国から】**（鈴木浩 編著）です。選考理由が以下のように公表されています。「全国120の（断られたところを加えれば、さらに多くの）小学校を、基本的に自転車に乗って一年かけて巡り、500点の児童画を集めて東京の地下通路ギャラリーで展示した青年の物語と、集められた画の本である。50年前とは言え、青年の情熱と無鉄砲さ、飛び込みの青年を受け入れて児童画を託す学校関係者の人に対する信頼と度量。現代では考えられないストーリーに驚く。そして何より、50年前の小学生の、時代を反映した500枚の画の迫力と面白さに圧倒される。ながく保管されてきた児童画が、デジタル化によりネット公開され、描いた本人に帰り始めたことも含め、画と物語の双方が相まって読む者の琴線に触れる本である。」（地方出版文化功労賞webサイトより）

奨励賞のあと１点は**【ＣＡＦＥモンタン】**（萬鉄五郎記念美術館 編集制作 / 杜陵高速印刷出版部 刊）、特別賞は**【鹿児島錫山（すずやま）鉱山遺構目録】**（志賀美英著 / 南日本新聞開発センター 刊）となっています。本賞は地方での出版活動を顕彰する日本で唯一の賞となります。

地方・小出版物のデータになります。綴じて保存してください。

honto
ネット通販で地方・小出版流通センター扱い本がご購入いただけます。
honto.jp
hontoではお客様の読書スタイルにあわせて
電子書籍でも紙の本でもご購入でき、hontoポイントは
ネットでも書店でも使えて、貯められます。
地方・小出版流通センター扱いのご当地本もネットで
ご購入いただけます。
くわしくは honto.jp へアクセスください。